

西原土地区画整理事業第Ⅰ工区第13次調査報告書②

なか こし
中 越 遺 跡

長野県上伊那郡宮田村

1994

宮田村遺跡調査会

西原土地区画整理事業第Ⅰ工区第13次調査報告書②

なか こし
中 越 遺 跡

長野県上伊那郡宮田村

1994

宮田村遺跡調査会

序

昭和31年、宮田村における初めての学術調査が実施されて以来、昭和59年まで14次にわたる発掘調査をしてきた中越遺跡では、昭和62年から、西原土地区画整理事業の進行にあわせて、12回にわたる調査を実施し、記録保存をはかってきました。平成5年度も、第13次調査として、区画整理の第Ⅰ工区内の4箇所で発掘調査を実施しました。この報告書は、そのうちの遺跡中央西寄りの、中央グランド東側で台地中央を縱断し、中越北線と中越南線を南北に結ぶ道路部分の調査記録です。

調査の結果、縄文時代中期の、住居址10軒と竪穴1基、土坑17基を発見することができ、当時の集落構造を知る手がかりを得られたと同時に、特に土坑の一つからは、ミミズク把手の付いた縄文時代中期中頃の大型の深鉢が完全な形で出土するなど、道路工事によってすでに遺跡が破壊されているのではとの私達の危惧に反して、多数の遺物と多大な成果を上げることができました。

生活道路を掘り返して調査するということで、調査中も、何かとご不便をかけましたが、幸い、地元の皆さんと工事関係者の御理解と御協力により初期の目的を果たすことができました。それらの皆さんと、宮田村遺跡調査会会长友野良一先生をはじめとする、現場での作業にあたられた方々に感謝申し上げ、刊行の旨意とする次第であります。

平成6年3月15日

宮田村教育委員会

教育長 小林 守

例　　言

1. 本書は、平成5年度に実施した、西原土地区画整理事業に伴う中越遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮田村長の委託をうけ、宮田村遺跡調査会が実施した。
3. 年度内に刊行しなければならない必要もあって、報告書の内容は、資料を示すことに重点をおいてある。
4. 報告書中の遺構実測図や拓影図の縮小率はおおむね次のようにしてある。
遺構全体図——1/200　　住居址——1/60　　遺構細部実測図——1/20
縄文土器拓影図——1/3
5. 本調査にかかる記録や図面類、出土遺物は、宮田村教育委員会が保管している。

目　　次

序

例言

第1章　遺跡の概観と調査の経過	1
第1節　遺跡の立地	1
第2節　調査の経過	3
1　調査にいたるまで	3
2　調査の組織	3
3　調査の経過	3
4　遺物の分類について	4
第2章　遺構と遺物	6
第1節　遺構検出状況	6
第2節　縄文時代中期の遺構と遺物	6
1　住居址	6
(1) 243号住居址　(2) 244号住居址　(3) 245号住居址　(4) 246号住居址	
(5) 247号住居址　(6) 248号住居址　(7) 249号住居址　(8) 250号住居址	
(9) 251号住居址　00 252号住居址	
2　竪穴	13
3　土坑	14
第3章　まとめ	16

第1章 遺跡の概観と調査の経過

第1節 遺跡の立地

中越遺跡は、天竜川右岸に発達した太田切扇状地の、北側の扇端部に位置し、扇端である天竜川河岸から遺跡の中心部までは、約1kmを測る。この扇状地面は、小河川によって放射状に開析され、いくつかの長峰状の台地の連なりとなっており、遺跡の位置は、大沢川と小田切川の間の台地上の大沢川がその侵食面を明確にし始める地点でもある（図1）。

大沢川と小田切川の間に形成された台地の上面は、両河川の侵食等によって、様々な変化をみせているのだが、遺跡付近では、台地南縁に部分的に形成された低位面と、北の広い高燥面とで構成されており、後者はさらに、やや低い南側と、高い北側に分けることができる。

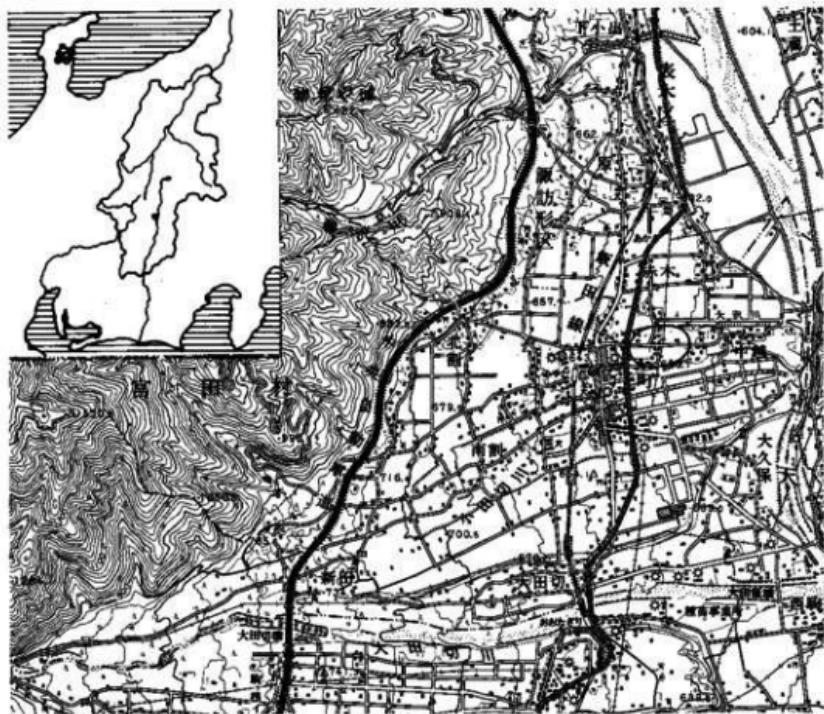


図1 位置図（5万分の1）

遺跡の範囲の台地上は、現在は東へゆるく傾斜する平坦面となっているが、今日までの発掘調査で、東流するいくつかの小さな流れや溝が確認されており、腐殖土層の厚さが極端に薄い地点などもあることから、当初は、もう少し起伏に富んだ地形であったと想定される。今回の調査でも、北の高燥面の南縁が出、表土下が完全な礫層となる地点やさらにはごく最近水がながれていた痕跡のある溝などもみつかっている。少し前まで、石積みを設けて畑を平坦に整地した痕が所々に見られ、現地形は、かなり整地された後の姿ということができよう。

遺跡付近の表土あるいは耕作土の下は、黒褐色土、褐色土、黄褐色土、を経て黄色土に移行するのが一般的であり、腐殖土の深い地点では、黒褐色土の上に黑色土が存在し、浅い地点では、黒褐色土、次いで褐色土が欠けるかごく薄い。黄色土の下には、太田切層状地を構成する拳大から人頭大、さらにはひとかかえもある巨大な礫が存在しているのだが、腐殖土の浅い地点では、それらの礫が表土下に顔を出している所もある。

中越遺跡には、高燥な台地北縁に展開する縄文時代前期の集落と台地南縁に連なる縄文時代中期の集落、南の低位面に位置する縄文後期の墓域と考えられる集団構造までが含まれており、結果としてその規模は、約24haと広大なものとなっている。

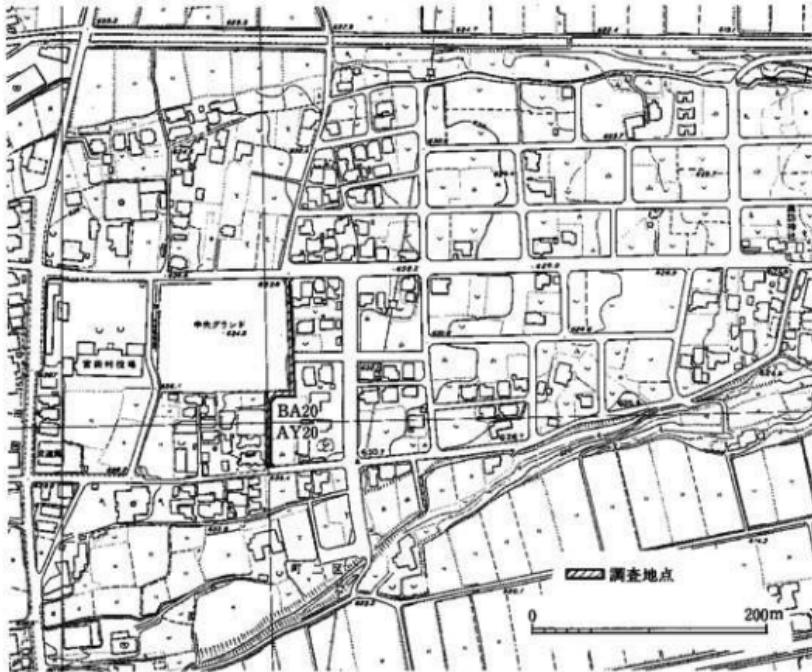


図2 調査地点図（「宮田村平面図」（平成元年12月作成）をもとに作図）

第2節 調査の経過

1 調査にいたるまで

昭和54年に策定された西原土地区画整理事業は、昭和62年に着工にいたり、現在も継続中であるが、それに伴って埋蔵文化財を保存する必要が生じたため、宮田村教育委員会では、宮田村遺跡調査会を組織し、発掘調査を実施して記録保存を図ってきた。

本報告の平成5年度2回目の調査は、第13次西原地区埋蔵文化財発掘調査として実施された。平成5年8月3日、宮田村長伊藤浩を委託者、宮田村遺跡調査会会长友野良一を受託者、宮田村教育委員会教育長林金茂を立会人として委託契約を結び、契約では、埋蔵文化財の発掘調査と報告書の作成を業務内容とし、平成5年8月3日から平成6年3月15日までを委託期間としている。

調査地点は、東西に広い遺跡の中央西寄り、役場の東の中央グランドのすぐ東を南北に走る、台地中央を縦断する村道17号線（中越北線）と南縁を走る村道206号線（中越南線）を結ぶ道路の部分である（図2）。

2 調査の組織

今回の遺跡調査にかかる組織と、現場の発掘調査に参加され、実際の作業をして頂いた作業員の皆さんには次のとおりである。

◇宮田村遺跡調査会	◇宮田村教育委員会	◇調査参加者
会長 友野 良一	教育次長 小林 守	小田切守正
委員 片桐 貞治	(平成5年9月まで)	松下 末春
〃 平沢 和雄	小林 修	木下 道子
〃 青木 三男	(平成5年10月から)	酒井 雅子
〃 伊東 醇一	係長 小林 修	林 美弥子
〃 唐木 哲郎	(平成5年9月まで)	西村アグ子
〃 加藤 勝美	係長心得 原 寿	伊藤 茂子
教育長 林 金茂	(平成5年10月から)	平沢きくみ
(平成5年9月まで)	係 小池 孝	
小林 守		
(平成5年10月から)		

3 調査の経過

調査に関する契約をとりかわしたのは先にふれたように8月初めだったが、西原区画整理事業に伴う今年度1回目の調査が終了したのが、予想以上の遺構、遺物の出土に天候不順が重なった

ため、予定を大幅に超過して9月の終わりとなってしまったため、現場における発掘作業を開始したのは、平成5年9月29日。本調査においても、遺物の多出する遺構が相次いで発見されたため、調査を終了したのは11月16日であった。

調査はまず北半へ、北端から東側に狭いトレンチを入れ、遺構や遺物包含層の有無を探った。クランク状に西へ折れる南端部（全体でいえば中央部）に濃密な遺物包含層と住居址と判断される落ち込みが発見された以外は目立った遺物包含層ではなく、遺構も竪穴1基だけであったので、北の大部分はトレンチ調査だけで終了とした。その後、遺物包含層内で2軒の住居址を検出したが、掘り上げた土を置く場所がなく、それぞれを掘っては埋め、掘っては埋める作業を繰り返さざるを得なかった。

中央部の東西方向の道路は、既設の道路の南側が2~3mの幅で拡幅されるということであったので、その畑地部分をトレンチ状に調査した。その結果、3軒の住居址を検出し、必要に応じて現道部分へ拡張する方法で調査を進め、結果として5軒の住居址と9基の土坑を調査した。

そこから南へ延びる部分は、石垣を積んである道路の東の畑への拡張部分をトレンチ状に調査したところ、北端（やはり全体でいえば中央部に近い位置）だけに落ち込みが検出された。結果としてそこには3軒の住居址があり、一部は既設の道路の下まで延びていたが、堅牢につくられた石垣の除去と、調査後に必要な工事開始までの間の生活道路への修復を考えると、道路下まで調査することはできなかった。先の東西方向の道路部分を含めて、調査しなかった範囲に遺構が存在した可能性は否定できない。

平成5年度は本報告以外の調査を長期にわたって継続せざるを得なかつたため、整理作業は雨天の日と、調査と調査の間の空き日を利用して実施したが、今回の報告書に、遺物の実測図を掲載できるまでの充分な整理をすることができずに終わってしまった。写真図版を見て頂ければおわかりのように、特に土器では、縄文時代中期中葉の終わりから中期後葉の初めにかけての良好な資料を得ているわけで、今後、機会を得て実測図を発表したいと考えている。

本報告の調査地点を、遺跡地に設定されているグリッドで表わすと、AY20~BC20、BC21、BC22~BL22ということになる。

4 遺物の分類について

本報告書における遺物の分類は、「中越遺跡発掘調査報告書」（宮田村教育委員会1990）での基準と呼称をそのまま使用している。ただ、縄文中期の土器の時期区分については、「長野県史考古資料編（四）遺構と遺物」に従った。

また、遺跡地には、昭和53年に10m方眼のグリッドが設定されており、今回もそのメッシュを使ったが、地区的呼称は、グリッド設定当時のものでなく、「中越遺跡発掘調査報告書」（宮田村教育委員会1990）のものを使用した。

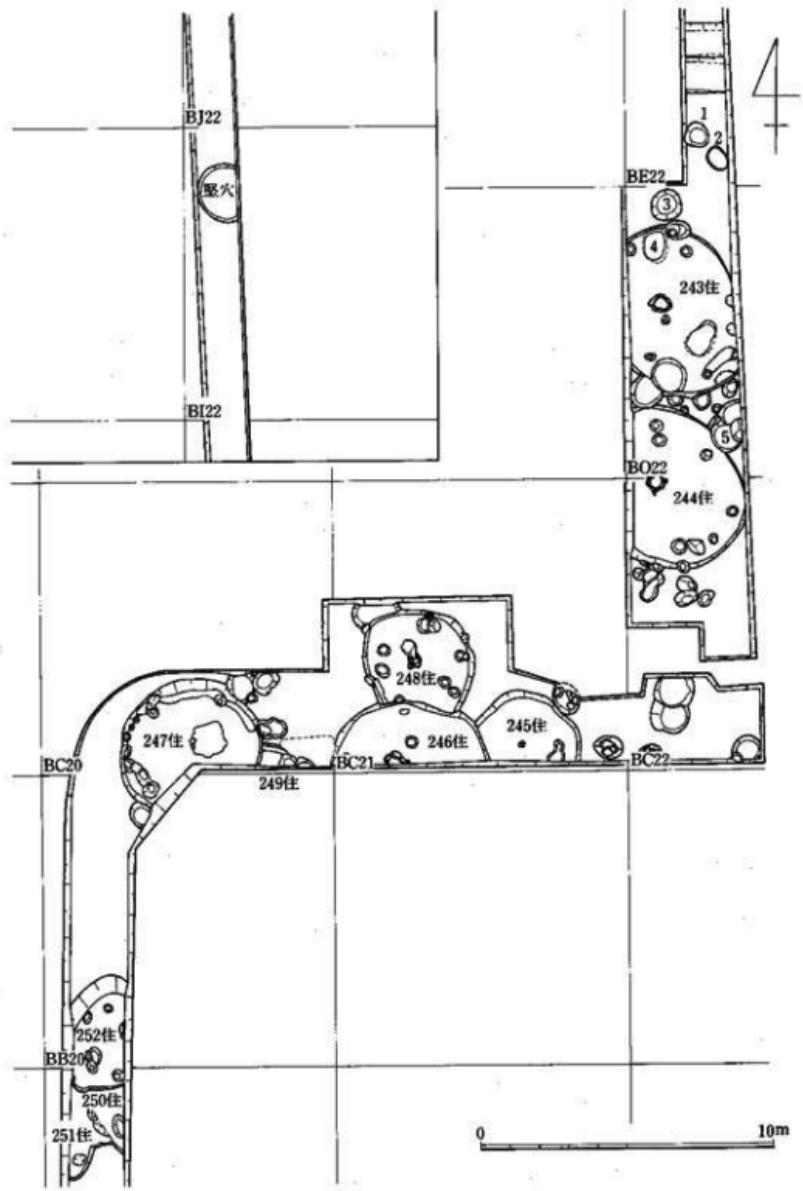


図3 造構全体図

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構検出状況

住居址は10軒である(図3)。調査の経過で明らかなように、南北に長い調査区のはば中央に集中している。北側は集落の北限となるが、南側は、今回調査した地点のさらに南での、道路上の下水道施設工事や、住宅建設工事に伴う調査の際に集落の一部が発見されており、南側の住居址が発見されなかった範囲が、集落内の広場的空間であった可能性を残している。集落の北限に重なるようにして遺物包含層が確認され、その北にごく最近まで水が流れていたと判断される水路の痕跡があることと、道路が東西方向に曲る部分でも遺構検出面が南へ傾いていることから、調査した範囲の状況からは、住居は、台地縁辺から中に入ったやや低い地点に東西に走る、ごく低い尾根状の微高地の上を選定して構築されたといった感がある。時期的には、中期初頭の終わりから、後業の初めの唐草文系土器が出現する前までである。なお249号住居址は、昭和53年に実施した範囲確認調査で部分的に発掘し、住居址であることも確認しているようなのだが、報告書を見る限り遺構番号は付されておらず、今回新たに番号を付けてある。

土坑の分布は住居址のそれと重なるが、北側により集中している。住居址とは時期差があり、特に北側ははっきりした中期初頭の土坑群といつていい。

第2節 縄文時代中期の遺構と遺物

I 住居址

(1) 243号住居址

B D-22グリッドに検出された大型の住居址で、中期初頭から中業の初めの土器が出土する土坑4基を切っている(図4)。東端が用地外、西端がグランドの石崖にかかるため全形を知ることができないが、平面形は、北西方向に輪線をおく $6.0 \times 4.5m$ の楕円形もしくは卵形となろう。検出面からの掘り込みは南西側で40cmであるのに、北東側では10cm程度しかない。北東の壁高が低かったわけではなく、より古い時期の遺物包含層が存在したため、遺構の範囲の確定に手間取った結果である。床面には粘土質黄色土が貼られ、柱穴より外側以外は堅い。一部の土坑上には粘土質黄色土による貼床面が観察された。周溝はない。炉は中央北西寄りの、扁平な長円窓を立てて組んだ長方形に近い石圓炉で、南東辺の石のみが上面平らに据えてあり、奥の石は破損した石皿を利用してあった。柱穴は調査範囲に5本検出され、それらの配置から7本柱が想定されるが、位置的に用地内にあっておかしくない東側の1本は、発見できなかった。南東の2柱間が狭目で、

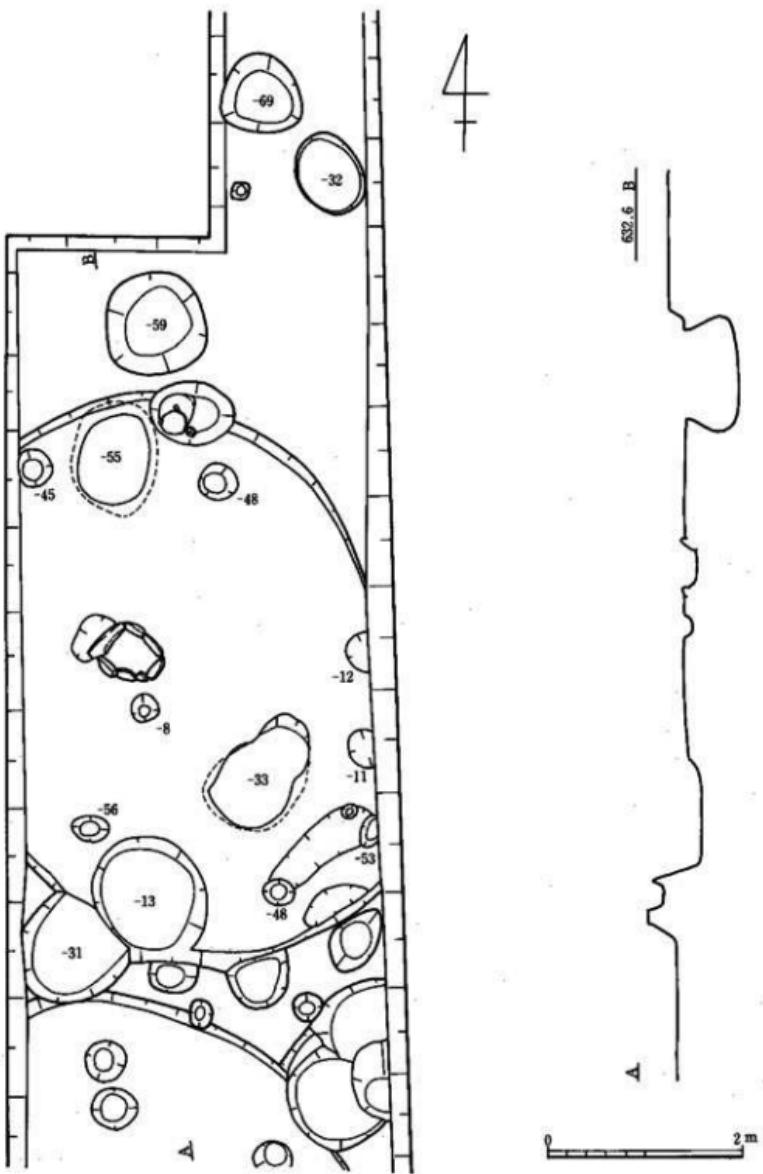


图4 243号住居実測図

2本の柱を結ぶようにして床に幅広の溝があり、壁下のピットとあわせて入口部の施設をしたい。

埋土から出土した遺物が多い。土器は中期中葉V期を主体として、中期後葉I期も少量混入するほか、埋土上層を中心に中期初頭の土器片がかなり入り込んでいる。石器は、打製石斧35、横刃型石器14、叩石2、凹石1、石皿1、礫端叩石2、敲打器3、礫石錐10、敲打製石器3、石鐵1があるほか、土製円板・土偶片各1が出土している。南の柱穴内から、一定量の中期中葉V期の土器片と磨製石斧1が出土しており注意される。

中期中葉V期の住居址である。

(2) 244号住居址

B C・B D - 22グリッドに検出されたが、西端はグランドの石崖下となるため調査してない(図5)。出土遺物から、北東の壁に一部かかっている土坑は住居址よりも古い。平面形は北西方向に軸線をおく $5.8 \times 5.0\text{m}$ の規模の長円形で、検出面から床面までは30cmを測る。埋土の最下には、多量の炭が混入する薄い黒色土層が全面にみられた。周溝はなく、北西半分の床面には壁際を除

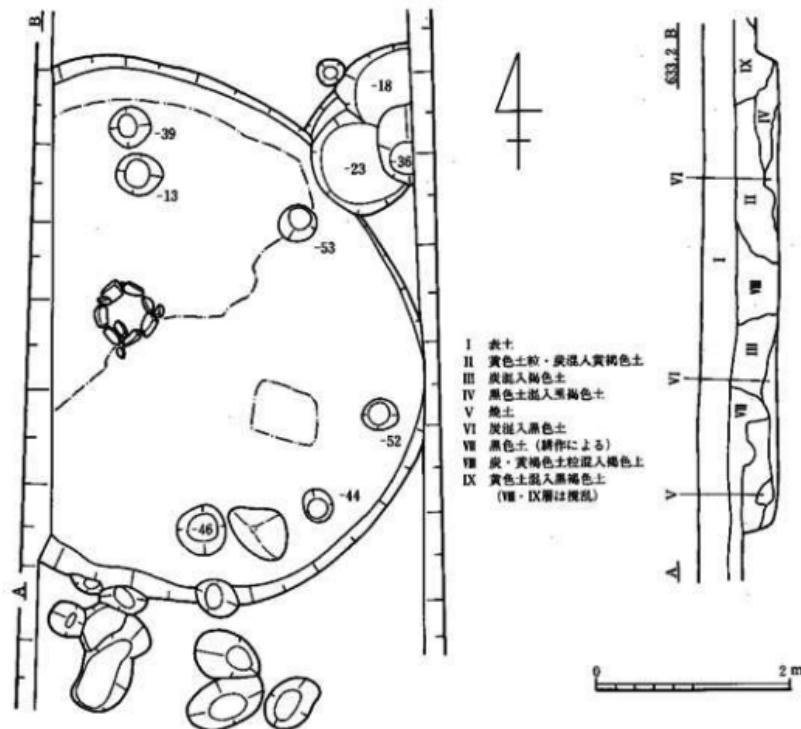


図5 244号住居址実測図

いて粘土質黃色土による貼床が観察されたが、南東半分にはごく一部にしかない。南壁近くには、大礫が取り除くことができずに床面から顔を出していた。柱穴は用地内に 4 本あり、6 本柱の建物であったことが想定される。中央北西寄りの炉は石を立てて組んだ方形石圍炉で、内部には、少量の焼土が観察された。

遺物は少ない。土器は中期中葉がほとんどで、V 期の樽型の大破片が目をひく。石器には打製石斧 15、横刃型石器 1、磨製石斧 4、敲打器 2、礫石錘 1、黒曜石製のスクレーパー 1 があり、ほかに土製円板 2 が出土している。243号住居址と同じ中期中葉 V 期の住居址である。

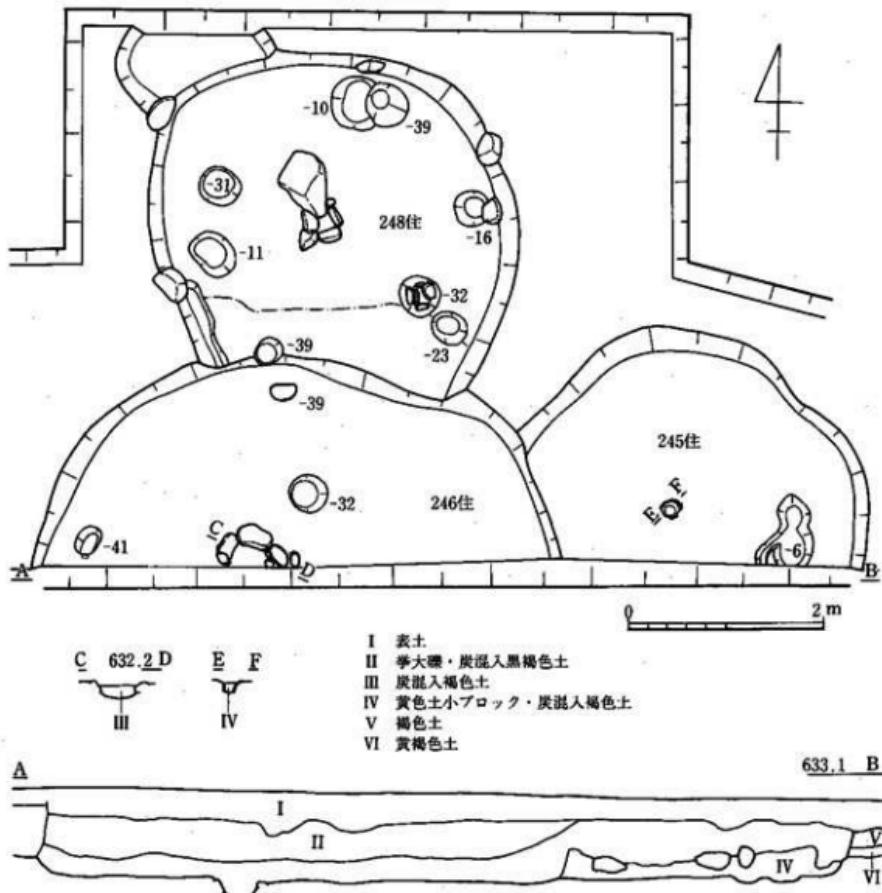


図 6 245・248号住居址実測図

(3) 245号住居址

B C21グリッドに検出された246号住居址に西側をわずかに切られる住居址で、南側は用地外となる(図6)。平面形は不整円形で直径4m弱。検出面から床面までは20~30cmを測る。埋土は、下層に黄色土ブロックと炭粒の混入する褐色土があり黄色味が強い。床面は全面が堅い粘土質黄色土による貼床で、壁際が2~3cmほどゆるく上がる。周溝はない。住居址内に柱穴がなく、屋外にも検出することはできなかった。炉はほぼ中央の埋甕炉で、内部に焼土等は残っていない。

遺物は少ない。埋土から、炉の土器と同一時期となる中期初頭II期のはば完形土器が出土している。石器に、打製石斧19、粗大石匙1、横刃型石器7、磨製石斧1、叩石1、敲打器1、礫石錐7、敲打製石器5。土製品に土偶の足3と土製円板1がある。

今回の調査区の中では最も古い、中期初頭II期の住居址である。

(4) 246号住居址

B C21グリッドに検出されたが、B B21グリッドに広がる南半は、用地外となるため調査していない。245・248号住居址を切っている(図6)。平面形は、北東側の壁の一部が直線的であることから、北西方向に軸線をおく直径5m前後の長円形を考えた。検出面から床面までは30~40cmある。埋土の上層には、本址が切っている2軒の住居址にはない、炭粒と拳大の礫が混入する黒褐色土がレンズ状に入り込んでいた。床面は全面が粘土質黄色土によって貼られ、南東に向かってゆるく傾斜しており、比高差は10cm以上ある。周溝はなく、柱穴は間隔をあけて掘られた2本を検出した。いずれも小型で平面形は壁と平行方向に細長く、垂直に掘られている。5本程度の柱数が想定される。炉は中央北西寄りに南半が用地外となる状態で検出された、平石を平らに組んだ石囲炉で、焼土等はみつかっていない。

遺物はきわめて多く、特に土器は、埋土上層の黒褐色土中から、完形に近い破損品が大量に投棄された状態で出土した。中期中葉の土器がかなり入り込んでおり、主体となる土器の文様に中期中葉末の要素も残っているが、いわゆる蒸し器の形態に低い隆帯を貼付する文様構成が顕著に見られることから、中期後葉I期の土器群としていいだろう。石器は、打製石斧29、粗大石匙1、横刃型石器10、磨製石斧1、敲打器4、礫石錐3、敲打製石器3、石錐1、スクレバー1、石錐1が、土製品は土偶の足と土製円板各1が出土している。

がの形態や埋土の色の特徴、出土土器から、中期後葉I期の住居址としたい。

(5) 247号住居址

B B・B C-20グリッドにまたがって検出され、南側半分ほどは用地外となる。229号住居址を切っている(図7)。検出面が荒らされており、掘り上がった段階で40~50cmあった住居址の深さは、当時の地表面を削り込んだ数字である。深い埋土の上層には、小礫と炭粒が混入する黒味がかった褐色土が厚いレンズ状に入り込んでいる。平面形は直径5m弱の円形だが、用地外の部分の形態によっては円みの強い隅丸方形となるかもしれない。床面は全面が粘土質黄色土によって貼られ、北と南の壁下に周溝がある。柱穴は用地内に5本検出され、6本柱の建物が考えられる

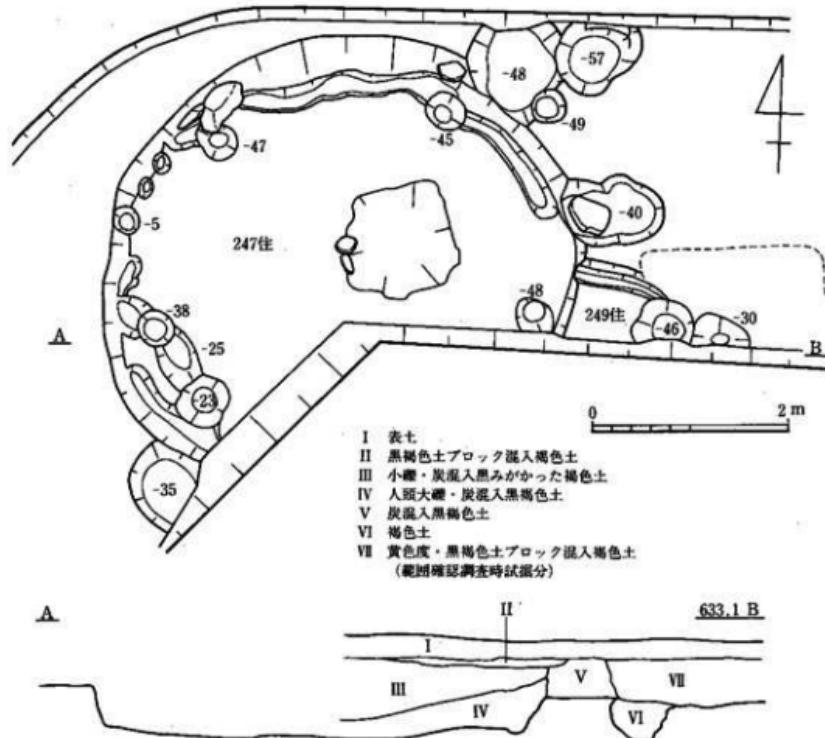


図 7 247・249号住居址実測図

が、南西の2本は浅く、入口部を構成するのかもしれない。炉は中央東寄りにあり、掘炬燧状石囲炉であったのだろうが、すでに炉石が抜かれ、検出時には、底にわずかに焼けた部分を残す方形の摺り鉢状のピットという状態にあった。埋土下層の炭混入黒褐色土中には人頭大の礫が多数混じっており、それらが炉穴の中まで入り込んでいたため判別が困難だが、炉の西縁の2個の石は上面が平坦で、他に建て替えの痕跡はないが、一時期古い炉である可能性もある。

埋土の量が多い分遺物も多いが、密度としてはさほどではない。土器はほぼ完形となるもの1点以外は破片で、大部分が中期後葉II期である。石器は、打製石斧20、粗大石匙1、横刃型石器5、磨製石斧3、叩石1、礫端叩石1、敲打器2、礫石錘5、敲打製石器1が出土している。

出土土器の中に唐草文系土器のものと断定できる破片がないことから、中期後葉II期の中でも古い時期の住居址と考えられる。

(6) 248号住居址

B C21グリッドに検出され、246号住居址に切られている（図6）。検出面が南東方向に傾斜し

ているため検出面からの深さは40~20cm。平面形は北北西方向に軸線をおく4.0×3.6mの卵型に近い不整円形となろう。床面には南の一部以外に貼床はされてない。床面が礫層の中に位置しているため、石の抜き跡との区別が困難で、柱穴は床面に検出されたいくつのピットの中から類推せざるを得ず、深さを主眼として4本柱を考えた。中央の北北西寄りに巨大な礫が掘り取れずに残されており、炉は、それを北西辺として組んだ方形石開炉である。炉内に焼土はない。

遺物はさほど多くない。土器は単純で、中期中葉II~III期の土器の破片と判断されるものが大半を占めるが、基本的に横位に区画され、三角押引文がまだ隨所にみられることから、II期の土器群としたい。石器は、打製石斧4、横刃型石器5、磨製石斧2、敲打器1、敲打製石器1が出土している。中期中葉II期の住居址である。

(7) 249号住居址

247号住居址の東に、用地南側に大部分が入り込む状態で検出された247号住居址によって切られる住居址である。昭和53年の範囲確認調査で発掘した範囲の北半が用地にかかっていることになる(図7)。床は粘土質黄色土で貼られ、壁下を周溝がめぐる。調査範囲の床面に2個のピットがあるが、性格までは断定できない。

今回調査した部分からは時代を特定できる遺物は発見されなかった。昭和53年の調査では本址が検出された調査坑からは中期後半の土器が多く出土したとある。

(8) 250号住居址

B A20グリッドに検出された。251号住居址の埋土を床上約10cmまで切り、252号住居址に北西側を切られており、用地にかかるのは西端のわずかということになる(図8)。規模や平面形は特定できないが、251号住居址の埋土にかかる部分のみ、床の表面を粘土質黄色土で貼ってあり、その広がりから、用地内に柱穴1本があり、壁下に周溝がないことは想定できそうである。

遺物はごく少なく、土器は中期後葉I期の土器片が少量、石器は打製石斧3と敲打器1が出土しているだけである。土器から中期後葉I期の古い時期が考えられる。

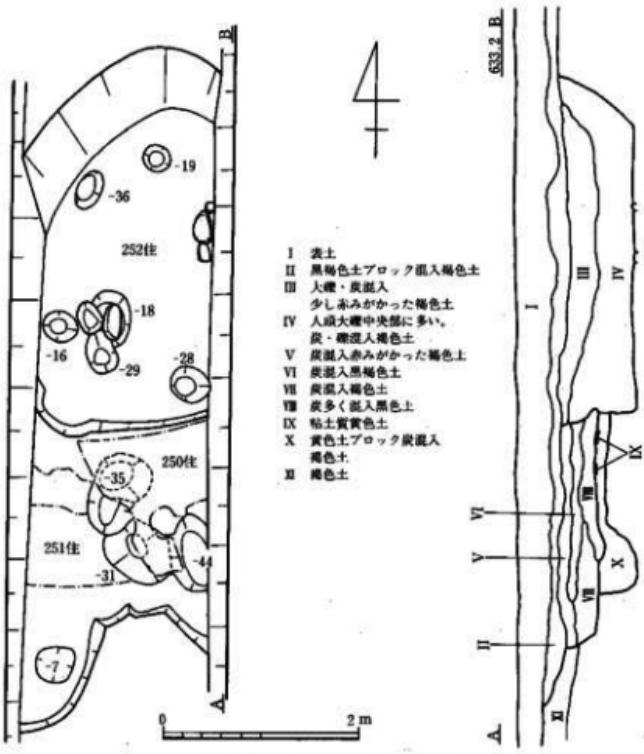
(9) 251号住居址

B A20グリッドに検出されたが、東半の埋土の大部分を250号住居址に、その後さらに北を252号住居址に切られ、しかも残っている西側は現道下となるため掘らなかったので、調査したのはごく一部ということになる(図8)。当初もっと南まで広がる範囲を落ち込みと考えたが、貼床の範囲を本址の南限としておきたい。250号住居址貼床下からピットがいくつか発見されており、内1本は柱穴としてよさそうである。

遺物は少なく、土器は中期後葉I期が主体で、石器は打製石斧2だけである。主体となる土器の時期の住居址としておきたい。

(10) 252号住居址

B A20からB B20グリッドに検出された、250・251号住居址を切る住居址で、東側は用地からはずれ、西端は現道下となるため共に調査してない(図8)。検出面からは深く北側で80cmを測



り、平面形は北東方向に軸線をおく隅丸三角形が想定される。掘り上がった状態では壁はゆるく立ち上がっているが、砂礫層中に構築された住居址であり、廃絶後の崩落の結果と考えられる。床は掘りっぱなしで、周溝もない。床面にいくつかのピットがあり、東の未掘部分に想定する柱穴の数によって、4本もしくは6本柱の建物となろう。床面中央の用地東壁際に平石を並べた部分があり、全体形は調査できなかったが、炉としていいだろう。

遺物は埋土の深さからするとさほど多くない。土器は量的には中期後葉Ⅰ期が主体だが、後葉Ⅱ期が一定量あり、埋土下層からも出土している。石器には、打製石斧7、横刃型石器3、小型磨製石斧1、礫石錐1、敲打製石器2がある。

土器の出土状態から、中期後葉Ⅱ期の住居址としたい。

2 堅穴

B I 22グリッドに発見された、直径2.0m、検出面からの深さ75cmの深い樽型をした造構で、埋

土には黄色味の強い土が入っている。遺物は底面から砾石錐が1点出土しているだけで付近にも目立った遺物包含層はないが、ほかの時期の遺物は発見されておらず、縄文時代中期の遺構である可能性が強いとだけしておきたい。

3 土 坑

土坑には、完形土器または完形に近い土器を埋めるもの、一定量の遺物を伴うもの、大砾が入るもの、みるべき遺物が出土しなかったものなどがあり、出土土器から、縄文時代中期初頭、中葉Ⅰ期、同V期、後葉Ⅰ期に分けられる。

北端の243号住居址の北側を中心に中期初頭の土坑群がある。いずれも大破片を伴う点で共通している。平面形もすべて円形だが、断面形は一定でなく、袋状となるもの、極端に深いもの、浅いものに分けられる。

中期中葉Ⅰ期は243号住居址の炉の南の1基で、住居構築時に上の大部分は削られているのだろう。深鉢の胴下半の無文部が出土している。

中期中葉V期は243号住居址の北東壁上と247号住居址の北東壁外にある。いずれも完形の深鉢を埋置しており、前者は、ミミズク把手を付した楔形土器が、土坑中央の底に口縁を付けて、北西方向にやや傾いた逆位で発見された。使用による劣化が進んでいたものの、土器は充分使用に耐え得るものであったと考えられ、破損状態や風化度の違いから、埋設後ある期間底部が地表面から出ていたことが想定される。重なり合う243号住居址と時期差はないが、住居址に付属した遺構とは考えられず、土器の位置から、住居址より新しいと判断した。後者の土器の出土状態については充分な観察ができなかった。

中期後葉Ⅰ期の土坑は245号住居址北東の1基で、土器片とともに大砾が出土した。時期を特定できる遺物が出土しなかったが、245号住居址東方に大砾が集石といつていい状態に入る土坑が2基あるほか、247号住居址の東壁に接して大きな平石を底に据える土坑がみつかっている。

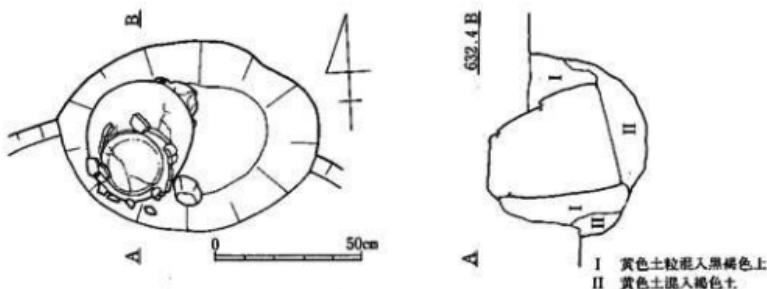


図9 243号住居址北東壁上土坑実測図



図10 縄文中期初頭の土坑出土土器（1・2—溝、3・4—図3の1、5・6—同2、
7—同3、8～11—同4、12～16—同5）

第3章 まとめ

今回の調査地点からは縄文時代中期の遺構と遺物が出土した。遺構ではなかったため触れなかったが、調査地区的北端で包含層下面が北へ向かって傾斜していることから、北の高燥面を限る東西に走る溝がそのあたりに想定でき、しかも量は少ない包含層中の遺物に前期の土器がほとんどなく、台地北縁の縄文時代前期の集落は、その溝を超えて南には広がらない。

縄文時代中期の集落の全体像は、まだわからない部分が多い。今回の調査でも、北縁を特定できた程度で、東方で実施してきた調査によって検出した住居址と合わせてもなお、集落の形態を具体的に示すまでには至っていない。ただ、住居址の所属時期は中期後葉II期の前半までで、同III期まで継続していたことが明らかな約120m東方一帯よりも、集落の終焉時期は早い。

面的な調査が実施されていないためほとんど様子がわからなかった住居址以外の遺構のうち、土坑について、一定の資料を得ることができた。なかでも中期初頭のものは、土坑群といつていい状態にあり、その土坑群の南に接して形成されはじめた集落が、中期中葉の終わりには土坑群の占地する一帯にまで広がっていくように見え、興味深い。

今回の調査地点で最も注目されるのが、土坑から逆位に埋置された状態で、縄文中葉V期の完形の大深鉢が出土したことであろう。土坑と土器の大きさから、土坑は土器を埋める目的で掘られたと解釈できる。

縄文時代の土坑の中から完形の土器が出土すること自体は珍しいことではない。例えば原村の居沢尾根遺跡では、総数164基のうち35基の土坑内から完形もしくは完形に近い土器が出土している。しかも、縄文中葉は土坑上面に横倒しに潰れた状態で出土する例が多いのに対して、中期後葉になると正位に埋置される例が出現するという変化が観察されており、ただ単に埋めるのではなく一定の位置に埋め置くことも異例のことではないと言えようが、この土器の場合、逆位に埋めることによってそこにかなり大きな土中の空間ができるわけで、例えば死産あるいは早逝した子供の埋葬施設といったことも考えられなくはない。土器が少し傾いていたのは、土坑が切っている住居址の埋没過程で、片側の土が住居址側へ動いた結果であると解釈できよう。このことは、土坑は、243号住居址の廃絶後、そこがまだ窪みの状態にあった時築かれたということでもある。

土器の文様構成と把手の背面の構成は明らかに顔面把手付土器の系譜を引いており、土器の全体形が現れた時点で、内側に顔面が付いているのを確信したほどだった。中の土を取り除いた時は落胆にかわったわけだが、具象的な形態ではないものの、把手正面の、大きなブリッジによって形づくられた2つの大きな円形の空洞は、目を象徴的に表わしていると見ることができ、顔面把手付土器の範疇に入るものとしたい。把手の頂部が欠損している。土器には煮沸具としての使用痕が明晰に残っており、使用による劣化が土器の部分的欠落に拍車をかけたようである。

写 真 図 版



243号住居址



244号住居址



245・246・248号住居址



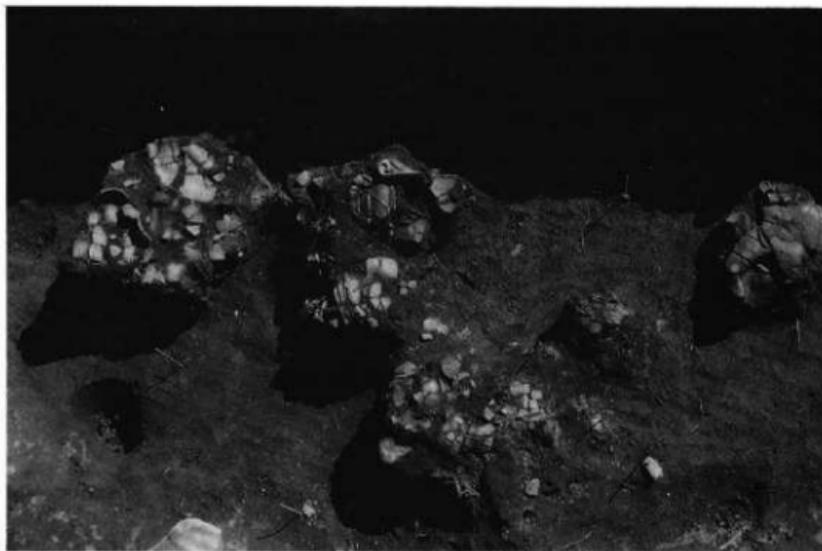
247・249号住居址



250～252号住居址



炉（左上：244住、右上：245住、左下：246住、右下：248住）

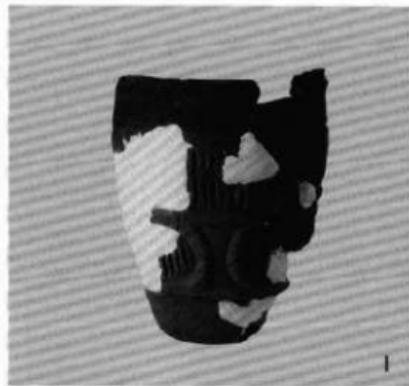


246號住居址遺物出土狀態



土坑埋設土器出土狀態

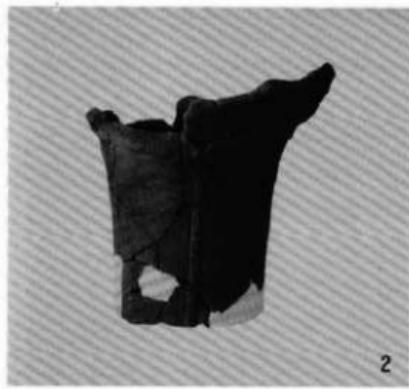




1



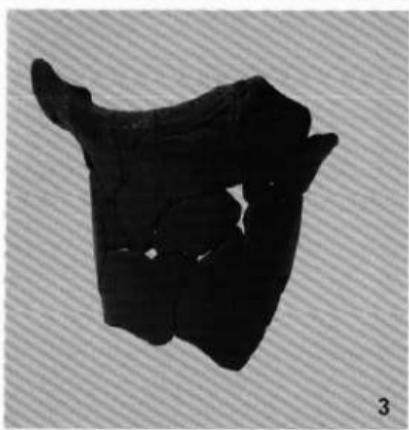
4



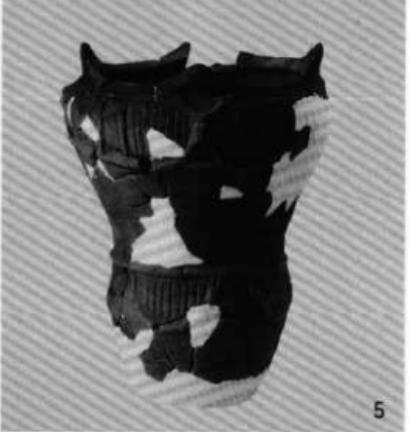
2



4

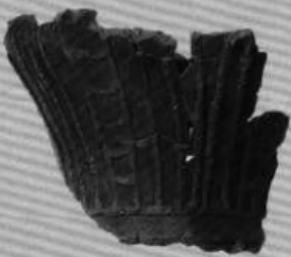


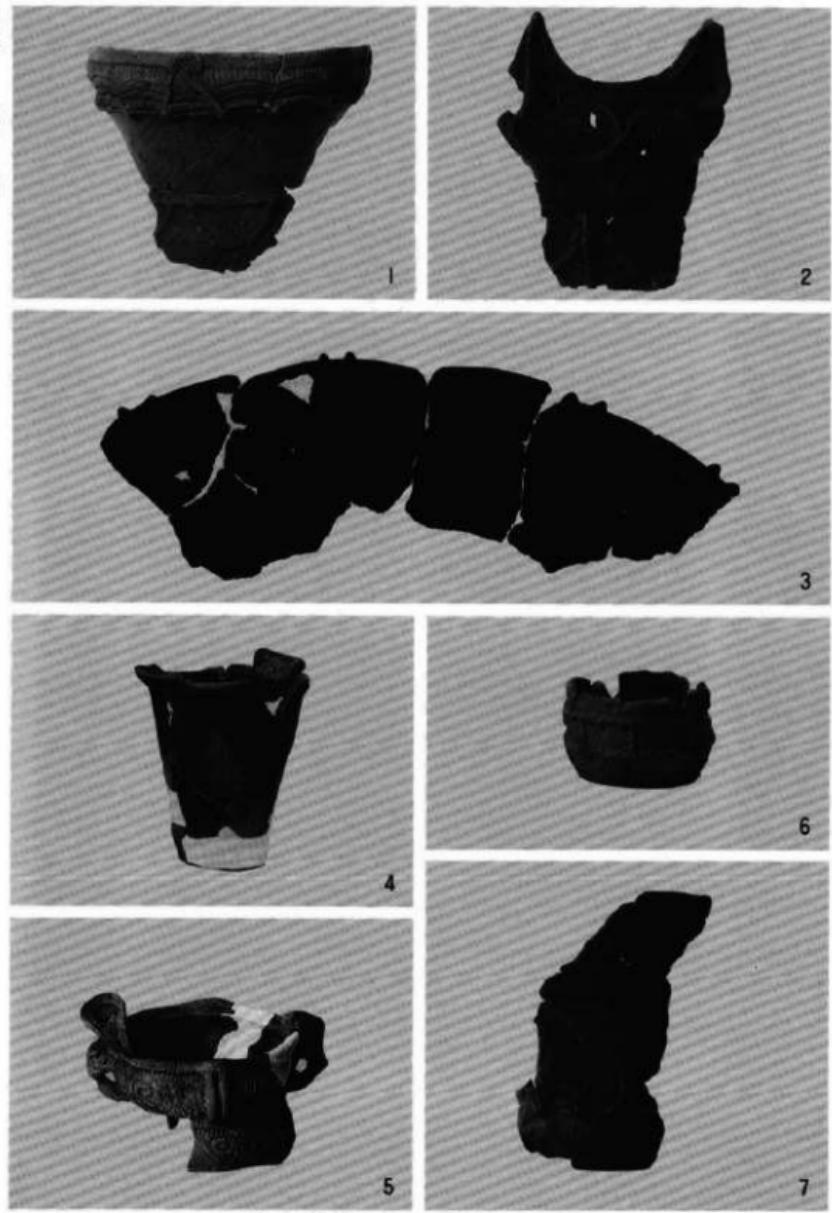
3



5

1 244住、2・3 245住、4・5 246住





1~3 246住、4·5 247住、6·7 248住

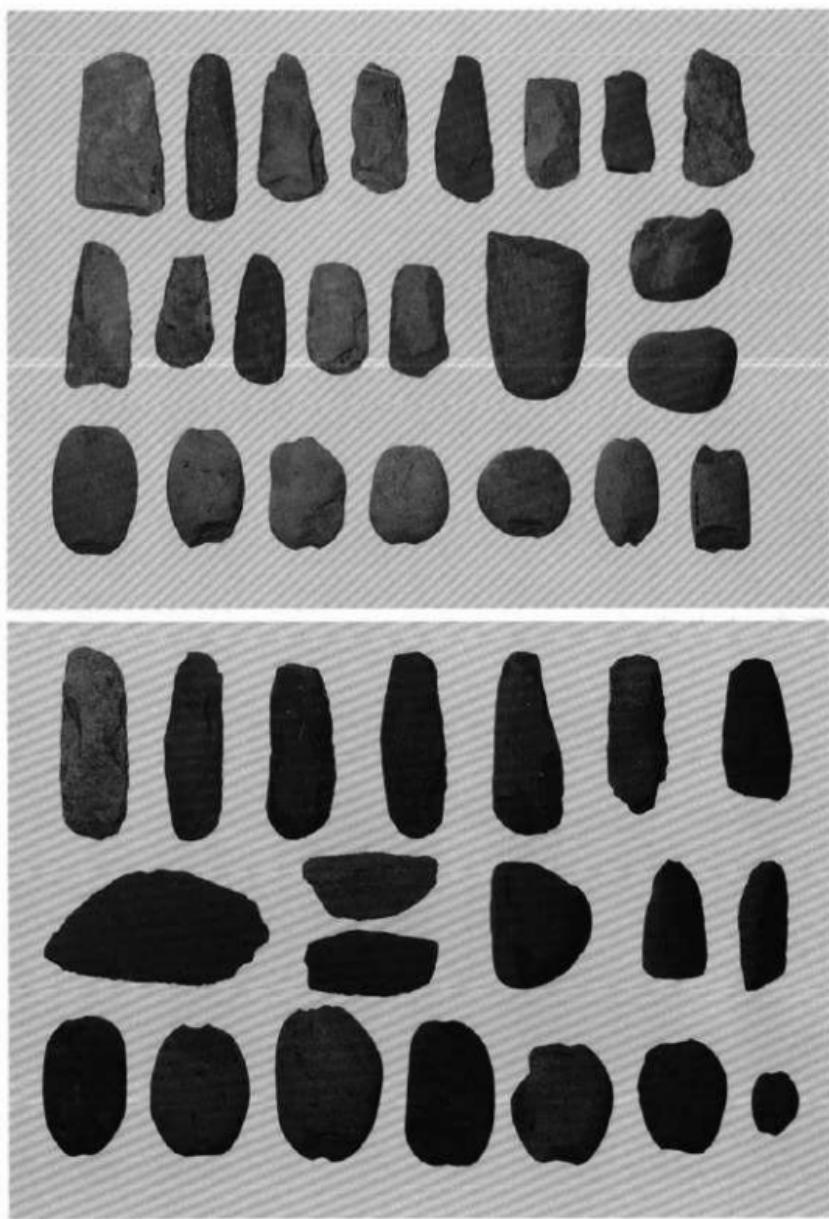


243住北東土坑

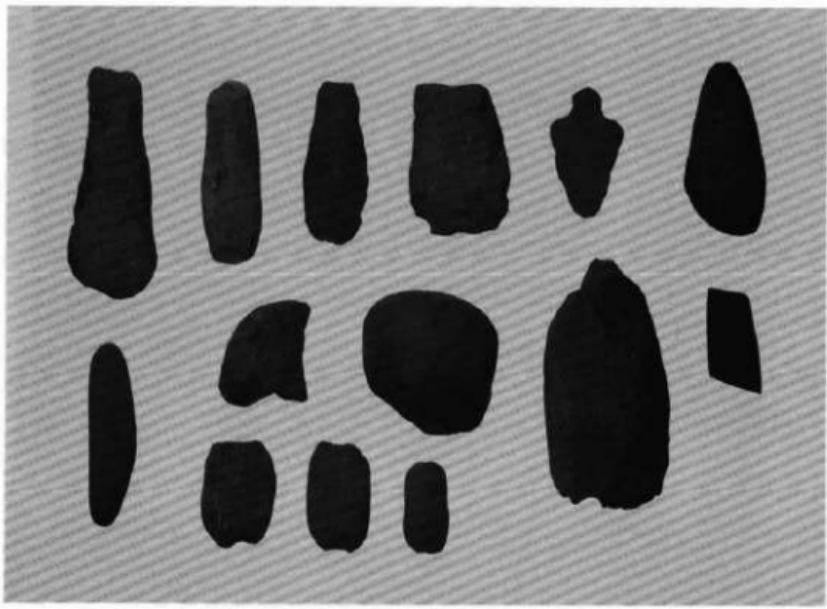
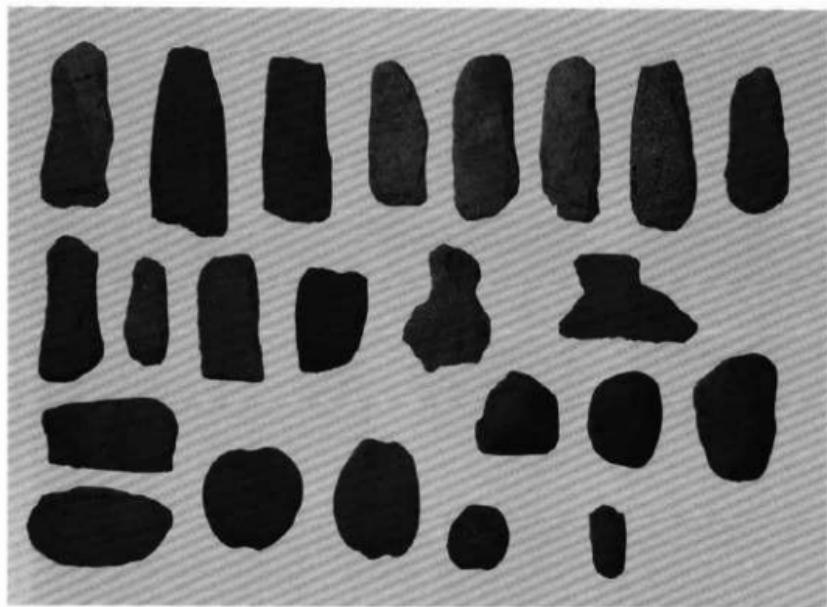


247住北東土坑

図版II 遺物 石器



243住（上）、245住（下）



246住（上）、247住（下）

西原土地区画整理事業第Ⅰ工区
第13次調査報告書②

中越遺跡

平成6年3月15日 発行

発行 宮田村遺跡調査会

印刷 ほおづき書籍社
長野市柳原2133-5

